

1-1 音楽嗜好の共有を通じた段階的な自己開示が受容性に与える影響

岩本・河崎研究室
2120030 中川 航輝

1. はじめに

人間関係の親密化は人々の幸福な生活の実現に重要な要素である。社会心理学の分野では、親密な関係を築く上で自己開示が重要なプロセスであることが明らかにされている [1]。しかし、若者の間では深い自己開示を避ける傾向が指摘されており [2]、人間関係の希薄化が問題となっている。自己開示の深まりを体系的に説明する社会的浸透理論では、自己開示は表面的なレベルから徐々に深い層へと進展していく段階的なプロセスをたどることが示されている。深い自己開示は、相手からの共感的な受容によって促進されることが明らかになっている [3]。

この段階的な自己開示を促進する手段として、音楽嗜好の共有が有効である。音楽は日常的な共通話題として機能し、さらに楽曲にまつわる個人的な感情や経験を伴い、深い自己開示となる可能性がある。

そこで、本研究では音楽嗜好の共有を通じた段階的な自己開示に着目し、その効果を実証的に検討する。

2. 仮説

本研究では「音楽嗜好の段階的な自己開示が受容性に及ぼす影響」を検証するため、以下の3つの仮説を設定した。

1. 低レベルから高レベルへと段階的に自己開示を行うことで、高レベルの自己開示への受容度が高くなる。
2. 楽曲を知らない、または興味度が低い場合でも、自己開示の受容度は大きく低下しない。
3. 音楽共有体験を終えた2者は、段階的な推薦を受けた場合に相手に対する受容性がより向上する。

音楽を通じた自己開示の度合いを定量化するため、「思い入れ」「歌える自信」「人気度」の3軸でユーザーの各楽曲を評価し、それらの組み合わせに基づいて自己開示を4段階のレベルに分類した。

3. 評価実験: 音楽共有セッション

実験のため、事前準備システムと実験用システムを Spotify Web API を使用した Web アプリケーションとして開発した。事前準備システムでは、ユーザーが作成したプレイリストから楽曲の「思い入れ」と「歌うことの自信」を4段階で分類できる。実験用システムでは、自己開示レベルを段階的に上げて楽曲を推薦する機能と、自由選曲機能を実装した。

実験は友人関係である被験者10ペアを対象に、カラオケ空間を模した閉鎖的な環境で実施した。被験者は推薦あり群と推薦なし群に分類され、全8フェーズの音楽共有セッションを行った。各フェーズでは、選曲、音楽再生、楽曲についての対話を実施した。推薦あり群にはフェーズに適した自己開示レベルの楽曲を推薦し、推薦なし群はプレイリストから自由に選曲を行った。

4. 実験結果

図1に、自己開示レベルと受容度の平均値の推移を示す。受容度は「聴いた曲について相手と楽しく話できた」「相手の曲に関する思いや経験が理解できた」の2項目(5段階評価)の平均値として算出した。推薦あり群は、後半フェーズで高いレベルの自己開示を促されても、推薦なし群と同等の高い受容度を維持した。

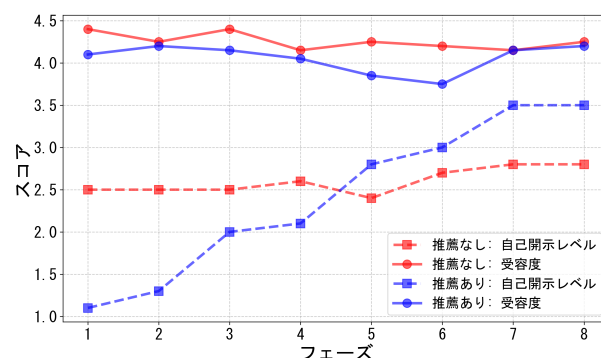


図1: 自己開示レベルと受容度の推移

また、相手の楽曲を知らない、もしくは興味度が低い場合でも、音楽を通じた経験や感情の共有は十分に受容されることが明らかになった。さらに、ヒアリングの結果から、推薦あり群では相互理解をより促進させ、親密度の向上に寄与する可能性を示した。

5. おわりに

本研究により、音楽嗜好の共有を通じた段階的な自己開示が、相手の受容性を向上させる効果的な手段となることが実証された。

参考文献

- [1] Collins, Nancy L, Miller, Lynn Carol. Self-disclosure and liking: a meta-analytic review, Psychological bulletin, 1994.
- [2] 和田実. 青年の対人関係の変容 久世敏雄 (編) 変貌する社会と青年の心理, 福村出版, 1990
- [3] 相川充, 高井次郎. コミュニケーションと対人関係, 誠信書房, 2010